

第5回鉄鋼労連アジア 労働事情視察 (ベトナム・台湾)



本社ブロック ブロックリーダー
笹倉 隆一
(企画本部 経理部)

日 程：2000年11月16日～22日
訪問国：ベトナム社会主義共和国（ホーチミン市）
 中華民国（台湾：高雄市、台北市）
参加者：約60名（内神鋼連合5名）

はじめに

鉄鋼労連では、アジアにおける鉄鋼産業の労働条件視察を目的に、従来から中華民国金属労組協議会（ROCC）との間で定期的に交流を行っていました。

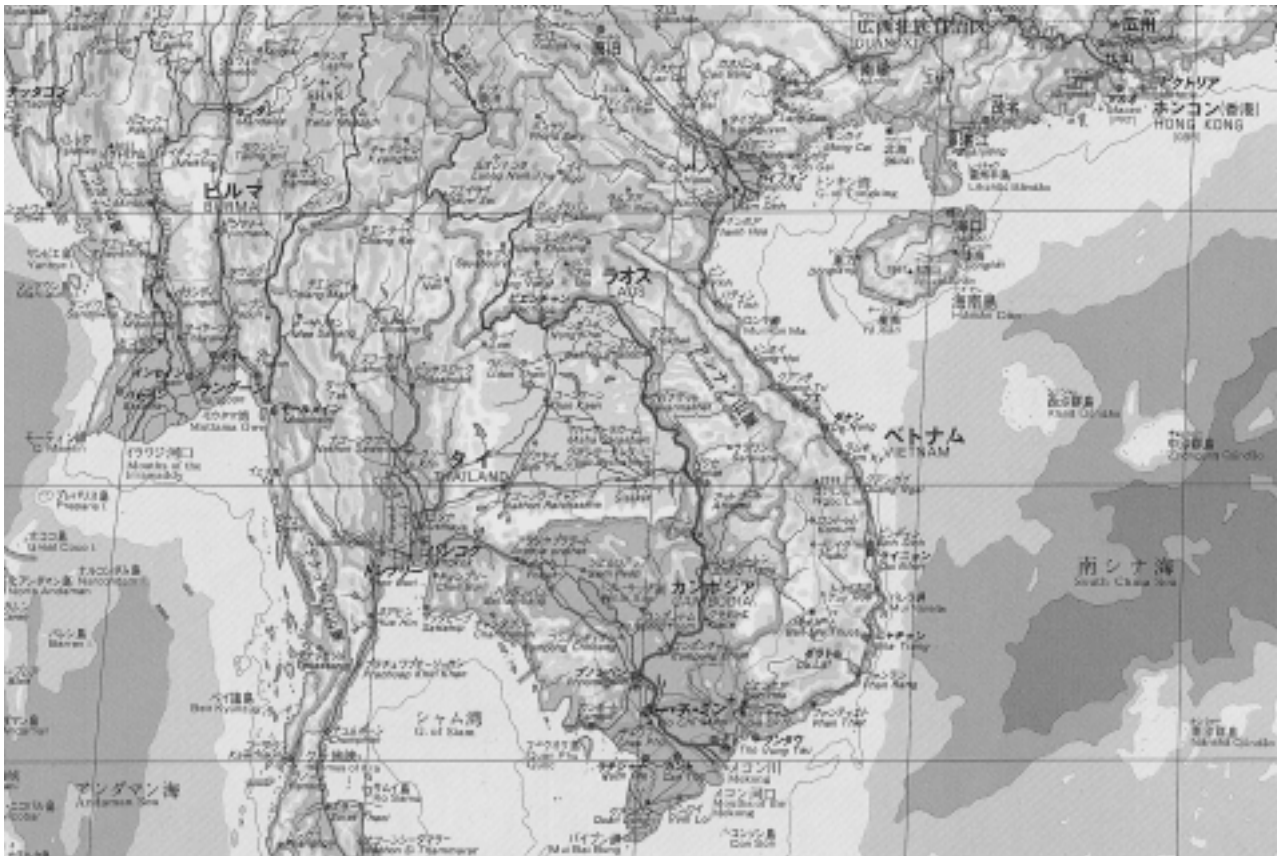
5回目となる今回はROCCとの交流に加え、ベトナムの労働事情視察をすることになり、神鋼連合の一員として神鋼労組、神鋼鋼線労組の方々とともにパンテックユニオンの代表として視察団に加わりました。

本日は視察団に参加して体験したこと感じたことについて報告します。

ベトナムはこんな国

ベトナムの正式国名は、ベトナム社会主義共和国で人口約7,640万人、面積は33万平方キロ（日本から九州を切り取ったくらいの広さ）です。南部と北部とでは気候が違い、南部は熱帯モンスーン地域に属し乾期（11～4月）と雨期（5～10月）がはっきりと区別されています。一方、北部は温帯モンスーン地域で年に2回乾期があるそうです。北部には人口300万人を擁する首都ハノイがホン川のデルタ地帯に位置し、南部にはハノイをしのぐベトナム最大の都市ホーチミンが存在しています。

言語はベトナム語ですが、その起源は今もってはっきりとは解明されておらず、タイ語やモン・クメール語等が組み合わさってできた混合語と考えられており、過去に支配した国の影響を強く受けています。



最近のベトナムの歴史に目を向けてみると、1975年にベトナム戦争が終結し現在のベトナム社会主義共和国が成立しました。それに伴い北部の社会主義システムを南部にも導入し、その

定着を急いだのですが、結果として南部の市民特に華僑の人々の反発を招き、かの有名な大量の「ボートピープル」を発生させることになりました。

最近のベトナム政治は共産党の単一支配には変わらないものの、1986年から始められた「ドイモイ（革新）」路線のもと市場経済システムの導入と積極的対外開放政策を進める中で、近年は9%前後の経済成長を続けてきました。

しかし、現在は国内の構造的要因に加え、アジア通貨・経済危機の影響もあり経済成長は鈍化し輸出も低迷しており、国際競争力の強化が重要課題となっています。また、一方で市場経済化により社会的矛盾（汚職、密輸、貧富の差の拡大等）が顕在化してきていることも事実です。

このような現在の社会状況の中、ハノイやホーチミン等の都市部での生活費は、大人1人で約100万ドン/月（日本円で約7,700円）は必要であり、一般に公務員の月収が60~80万ド

ベトナムの歴史

略史：千年を越える中国支配を経験した
中国文化圏最南端の国

- 1883年 フランスの植民地化
- 1945年 ベトナム共和国成立
- 1949年 ベトナム国（親仏）成立
- 1954年 ジュネーブ協定により
南北分割
- 1955年 南部で共和制成立
- 1965年 米軍直接介入
- 1973年 パリ和平協定
- 1975年 南ベトナム崩壊
- 1976年 南北統一

ン（日本円で約4,600円～6,100円）であることを考えると、副業がないと暮らせないというのが実状となっています。もっとも、郊外の田舎で暮らす場合には、生活費が安いので副業を持つ必要がないようです。

ビエンホイ製鉄工場視察

工場概要

創 業：1967年
従 業 員 数：750名（内女性110名）
組 合 員 数：690名（オープンショップ制）
年間生産量：棒鋼8万トン（前年度4万t）
勤 務 体 制：3交代勤務

最初の公式行事としてホーチミン市郊外の工業団地にあるビエンホイ製鉄工場を視察し、工場長と組合長から様々な説明を受けました。

現在、設備を順次近代化し数年の内にISO 9000シリーズを取得する予定をたてているそうです。

また、平均年齢38才の従業員が手にする月収の平均額は240万ドン（前年度190万ドン）で、市場動向に関係なく生産量に応じて賃金がスライドするしくみであり社会主義国らしさが良く現れていました。この国の主要輸入品目の上位には鉄鋼が位置していることから、量の確保が重要課題なのだと思われました。

一方で品質を重視している点も強調されており、製品品質の良悪・原材料の歩留りに応じて毎月職場単位で賃金が上下する制度が労働協約に盛り込まれているそうです。市場経済化政策のもと、すでに能力主義が採用されていることは注目すべき点の一つだと感じました。

実際の工場視察でまず目に付いたのが多くの女性作業員の姿で、設備のオペレーターだけでなく生産ラインにも女性が配置されている姿は、過酷な製鉄現場には意外な思いがしました。

ラインは半オートメーションで一部手作業が残っており、私自身がこの地の気候に慣れていないせいもあったのですが、とにかく工場内は暑く、実際に作業されている方々は大変なのだろうと感じた次第です。

できればこのような厳しい環境で作業している女性達に、仕事に対する思いや将来の夢等について、聞いてみたいという衝動に駆られました。

工場内はきれいに整理されていましたが、むしろ製造ライン以外は何もないというのが実際のところでした。また、平均気温が30度をこえる日中の暑さ対策が、建屋には壁が設けられておらず、吹きさらしでした。

見学した熔鉱炉は、実際に火を噴いている中に屑鉄を投入していたのですが、その炎は建屋に燃え移りそうな勢いで火を吹き上げており、このような状態でISO 9000シリーズの取得が可能なのか若干疑問に感じました。また、同じ熔鉱炉からは炎とともに真っ黒な煙が大量に排出され、気を配ることができるのは製品の品質までで、環境にまではとても配慮する余裕はなさそうな様子でした。きっと環境面での法整備も遅れているのでしょう。

ベトナムの労働事情

工場視察の後、ホテルへ戻りバンケットルームで、ベトナム労働総同盟のアイク・ツー女



史よりベトナムの労働事情についてのレクチャーを受けました。

この組織は、各県（全国61県）の連合協会を束ねる形でベトナム労働総同盟があり、労働者の権利確保と労働協約締結時の指導等を行っているそうです。加盟者は約500万人で、総労働人口1,700万人のうち農業就業者を除く大部分が加盟している組織です。このような中、全産業の中でも鉄鋼産業は若者の就業意欲が旺盛であり、日本で3Kとして嫌われていることを考えると対照的でした。これは精神面だけの理由ではなく、鉄鋼産業従事者の賃金の高さにもよるのだと考えられ、ちなみに、ベトナムの平均賃金のトップは金融・サービス産業で、それに鉄鋼産業が続いているそうです。

また、ベトナムでは終身雇用という概念がなく、能力があればより条件の良い職に転職できる雰囲気があり、最近では若者の文化レベルが高くなっており、国家が強力に推進しているIT関連産業に、今後、優秀な人材が集まるだろうとの説明がありました。

その他、労働時間は週48時間で一部産業を除き残業は行われておらず、定年は男性が60才、女性が55才と決められています。

バイクは“HONDA”？！

ベトナム人の交通手段は主にバイクで、現地言葉で“HONDA”と呼ばれています。なにもバイク市場をホンダが独占しているわけではなく、スズキ等他のメーカーのバイクも走っているのですが、少数派であり“HONDA”がバイクの代名詞となっているようでした。ホンダは、ベトナムの地でバイク市場のディフェクトスタンダードを勝ち得たのかもしれませんが。

ベトナムのガソリン単価は50円/L程度で、収入（庶民の平均月収は約1万円）に比較するとかなり高価で、車は庶民の足としては贅沢なものとなっています。もっとも、バイクであっ

ても、いざ新車を購入しようとする日本円で15～30万円は必要であり、自ずと5万円程度の中古車が売られているようでした。実際に、現地で走っているバイクは中古車が主流を占め、ベトナムの庶民が中古バイクを買う感覚は、日本の庶民が新車を買うこととほぼ近いということでした。

バイクは70cc以上の場合免許が必要ですが、50ccクラスは当然免許を必要としません。（18才以上であることが条件）定員は大人2名までで、子供については制限がないため、夫婦と子供3人の5人乗りというケースも珍しくありませんでした。

ベトナムにおける交通モラルは限りなく低く、歩行者優先等という意識は、最初から持っていないと思って正解です。町中でも信号は少なく、かなりの大通りに行かないと信号を見付けることはできません。

一つ例をあげると、車が左折する場合（ベトナムは右側通行）は、まず頭を突っ込み、クラクションをめいっぱい鳴らしながら、手で対向車の動きを制して曲がります。

バイクはもちろんノーヘルなのですが、子供を乗せる時はヘルメットをかぶせており、親心は万国共通と感じました。

信号は極端にすくないものの、バイクは限りなく多く、目的地にたどり着くためにはどうしても横断歩道を渡らなければなりません。私たちが立ち往生している横をベトナム人は悠々と道路を横断しているのです。意を決して道を渡り始めたのですが、意外なことにゆっくりと歩くとバイクの方がよけてくれるので、同じペースで歩けば大丈夫なのです。しかし、一度立ち止まると大変で、次々に来るバイクのため道の真ん中に取り残され、抜け出せない状況に陥ってしまうのです。私たちの場合は、みかねた警察官がバイクを止めてくれて何とか脱出できましたが、とにかく横断歩道を克服しなければベトナムではシティーウォーカーにはなれないのだと痛感しました。



アオザイの女性が多いわけ

町の中では、ベトナムの民族衣装であるアオザイを着ている女性を見かける機会が多くありました。旅行会社のパンフレット等には必ず出てくるため、ご存じの方も多いと思いますが、実際に目にした姿はパンフレット等よりずっとエレガントで、非常に良い印象を受けました。

そして、町中でアオザイを着た若い女性を目にすることが多いわけは、白いアオザイが女子高校生の制服となっているからであり、日本の女子高校生が着る制服に比べると格段に良いと感じました。民族衣装であるので、制服として採用するのは当然のことかもしれませんが、同行されていた方々はみなさん良い印象を持ったようです。

商売の基本は笑顔と正直

ベトナム最終日の午前中は自由時間だったので、3班（神鋼グループ）でホーチーミン市最大のベンタイン市場に出かけました。大変な活気で、無数の商店が軒を並べ、商品が所狭しとならんでいました。ベトナムでの2日間の経験から、言い値で買ってはいけないことを学習しました。まず半値以下から切り込んで、最後に半値から7掛けの間で折り合いをつけ、これで

初めて納得して支払いができるわけです。

この値段交渉は癖になるほどおもしろく、同行した班の方はこの快感を味わうために、「どうするのそんな物」と言いたくなるような品々を、次々と購入していました。きっと帰ってから奥様に怒られているでしょう。

ベトナム滞在中はバスの移動がほとんどでしたが、ホテルからバスまでのほんの数メートルの間に「5コ、シェンエン」と口々に叫びながら、ライターや扇子を持った物売りが群がってくるのです。これはあらかじめ聞いていたので特に驚きませんでした。しかし、この後の粘りは驚きで、移動するバスをバイクに乗って追いかけてながら窓越しに商売をします。5個/千円が最終的には12個/千円になるのだから、すべて生きるためとはいえ大変なパワーだと感じました。

このような物売りの中に10才位の男の子がいました。いつも笑顔で父親のバイクの後ろに乗り商売をしていたのですが、ある時、私の前の席に座っていた人と交渉が成立し、その人は商品を受け取ったものの、1個足りませんでした。その人は騙されたと言い半ば諦めている様子だったのですが、すぐに少年の乗ったバイクが近づいてきて、1個足りなかったというような手招きをして商品を1個手渡しました。

まさに商売の基本は笑顔と正直さであると思ったエピソードです。

最終日は米国のクリントン大統領の訪問と重



なっていたために、警察により物売りが一掃され少し寂しい思いでした。そう思ったのは、きっと私だけではないと思います。

クチの地下道でなにを思う

ホーチミン市から2時間程度の郊外に、ベトナム戦争時代にクチゲリラの基地として作られた、全長240kmの地下トンネルがあり、現在は観光用施設として解放されていました。

坑道は観光客のために広げられているものでも狭く、ゲリラはこの中を縦横無尽に走り抜け米軍を苦しめたそうです。また罾や武器の展示も多数ありました。

この施設では意外に米国人らしき観光客が多く、終戦から25年で彼らは何を思い、そしてベトナム人ガイド達は、彼らに対してどのような感情を抱いているのだろうか、複雑な気持ちになりました。

また、展示場の奥には射撃場があり、1発＝1\$で実弾を撃つことができるようになっており、「戦争」「平和」「実弾射撃」...様々な思いが頭を巡りました。

何でも経験だからと勧められたのですが、「おじさん、世の中には経験なくて良い事だってあるんじゃないの」と心の中でつぶやいている自分がありました。



ベトナム視察を終えて

都市部の近代化と農村部の立ち後れ、社会主義国家での矛盾の顕在化（貧富の差の拡大、汚職等）、下水・道路等のインフラ整備の遅れ等、多くの問題を内在していますが、日本の高度経済成長前夜を思わせる国民の勢いと、ASEANへの副事務総長の派遣や、クリントン大統領の訪問に代表される米国との関係強化等、国際社会での位置固めを考えると、近い将来、日本はこの国の後塵を拝するのではないかとの思いを強くしました。



中国鋼鉄有限公司工場視察

台湾では、高雄市にある中国鋼鉄有限公司の工場を視察しました。

最初に組合長と人事部長の挨拶を受け、会社紹介と組合紹介のビデオを観てから組合長への質疑応答へ移りました。日本側から「人員削減のための出向があるか？」という質問が出ましたが、「技術交流的な出向はあるがリストロ的な出向は実施していない」という回答でした。

人事部長の話の中で、中国鋼鉄は世界で3本の指に入る鉄鋼メーカーであり、残る2社は日本の新日鐵と韓国の浦項総合製鉄（POSCO）だと言っていたことが、会社のプライドを象徴し

ており印象的でした。

実際の工場視察は敷地が広い（神鋼加古川より広いらしい）バスに分乗して案内されました。4基の高炉と13の工場区を有し9,000人の従業員が働く工場は確かに広く、案内された圧延工場は完全に自動化されて従業員の姿は見当たりませんでした。まさにベトナムのビエンホイ鉄鋼工場とは大変な違いだと感じました。

ただ、出荷場の付近に野ざらしにされた錆びた鋼板の山が、景気が悪くなっているという組合長の言葉を裏付けていました。

台湾鉄鋼労働協会との交流

高雄で中国鋼鉄を訪問した日の夕食は、台湾鉄鋼労働協会との懇親会となりました。

漢字の国なので、筆談が可能であったため「住所、神戸、隣大阪、隣京都、台湾震災被害甚大、阪神大震災謝謝」とまでは書いたものの、普段パソコンのお世話になっているせいか、漢字がなかなか書けませんでした。適当に書いた字の横に、台湾ではこう書くというように漢字を書

かれ、「すみません、日本でもそう書きます。」と日本語で謝ったものの通じる訳もなく、日本の漢字が誤解されたかもしれません。もし台湾に行かれる予定の方は、漢字を少し復習しておいては如何でしょう。

宴もたけなわとなり、北国の春が演奏されるとおじさん達の大合唱が始まり、そして最後は肩を組んで「星影のワルツ」を歌うことになりました。隣は台湾の方であり、この訪問団に参加しなければ、外国の方と肩を組むこと等、一生なかったかもしれないと思うと、酒の勢いも手伝って感慨もひとしおでした。私自身もしっかりと星影のワルツを合唱しながら自分が日本人であることを改めて自覚した次第でした。

台湾視察を終えて

ベトナムでの視察で強烈な印象を受けた私にとって、移動に次ぐ移動でゆっくりとする時間がなかったのも影響しているのか、台湾の近代的な工場と町並みは日本と大差がなく、あまり興味深いものを感じる事ができませんし



た。

最近まで安価な労働力により世界の情報通信機器の製造工場として発展してきた台湾も、ここにきて賃金の高騰によりその地位を東南アジア諸国や中国に奪われつつあり、産業が空洞化しているという説明を聞いて、以前より日本で問題となっている産業の空洞化がここ台湾でも発生していることを改めて知りました。

おわりに

今回の視察によって、私は様々なものを得ることができました。ベトナムの勢いを肌で感じられた事、同行した神鋼グループの仲間等、私にとっては大きな財産となりました。

欲を言えば、現地の労働者との交流の機会を作って欲しかったと思います。もっと生の声を聞くことができれば、より良い視察になったのではないかと思います。

実際に現地に行って、自分の目で見て感じなければ判らないことが沢山あることを実感しました。

今回このような貴重な体験をさせていただき、職場のみなさんに感謝申し上げますとともに、より多くの組合員がこのような機会を与えられるように期待して、視察の報告と致します。

以上